文人の立場から[[1]](#footnote-1)

菊池寛氏等を中心に半島の文藝を語る座談會

[出席者]　 菊池寬氏（文藝家協會）小林秀雄氏（同）中野實氏（同）鹽原時三郞氏（精動理事長）增田道義氏（同理事）奥山仙三氏（同企畫課長）李光洙氏（文人協會）金東煥（同）兪鎭午（同）鄭寅燮（同）朴英熙（同）辛島驍（同）杉本良夫氏（同）寺田瑛氏（同）德永進氏（大每記者）

八月六日・半島ホテル

【1】　文人協會の成立

【鹽原精動理事長】今日はどうもおしいところをありがとうございました。朝人會は、昨年の秋やうやく出來ましたが、それまでは朝の文人は合に一がなかつた。それがやうやくこの國家目標につて一されましたで、これからは半人の人は、光洙さんをめさういふ度でんで行くだらうとつてをります。

【李光洙】人會を作つたのは私達でありましたが、御承知の通り朝が日本人にならうと決心したのは、支事が起つてからでありまして、それまでは法上は日本國であつたけれども、心ではどうもさう行かなかつたのであります。それが南は來られるし、支事は起こるしして時を認しまして、朝人も日本國として遠に生きて行かなければならぬといふ自を持つやうになりました。ところが、人といふものは御承知のく朝にも主といふもの、それは○○とまでは行かなくてもを持つて行かうとする、それから左主一といふものがありまして、中々時の認が出來なかつたのであります。それが昨年になりまして、私達も日本の朝として大きな動に参加しなければならぬといふ自をこしまして、二人寄り、三人寄りして遂に二百數十人からの人を集めて朝人會が出來上つたであります。そのとき、こゝに見えてをられる原閣下に私達から非になつてきたいとお願ひして、御承を得たわけであります。會が出來てからこれといふ活動はありませんが、一度東京に行つての先の方にもお會ひして、私達のつてをることを申上げ、今後の御力をおひしたいとつてをりましたが、び延びになつて實現出來ない中に、さんがお出でになつてちよつと先を制せられたやうなになりましたが、……近い中に十人か二十人の人が行きまして東京のさんから御を仰ぎたいとつてをりますから、どうぞくおいします。朝の小説といふものはでもあり、出物も少ないのでございますが、し朝のには諺の學が一の讀み物になつてをります。に青年及びその他のに一番大きなをへるのは學である。學が或方にめば朝に影響を及ぼすことも大きい。これは內地より朝の方が學の影響が大きいから、朝の文人達が國として、日本國のために盡さうといふ氣持を持つことは、朝のためばかりでなく、國全として相當のがあるとつてをります。今內地人と朝人と合せて二百四、五十人は集まつてをります。もう一つ朝人會でやつてをることは內地、朝が一つになつて、內一にならうといふことですが、それをやるには政治もあり、もありませうが、による人、人のといふことが最も大事だとつてゐます。內地の學を諺文だけしか讀めない人に讀ませ、朝人の書いた諺の學を內地の方に見てく、內地と朝の人がして相互ひに心を知り合ふといふことが主な目であります。何卒宜しくおひします。

【菊池寛】光洙さんの作品は諺文で書かれたものですか。

【李光洙】さうです。

【鹽原理事長】譯したのは誰ですか。

【李光洙】誰か知りませんが、發行所の方でさせたものに私がし手を入れました。（昭和15年8月13日）

【2】　　內血の繫がり

【菊池寛】去年あたりから朝學が內地にされるやうになつて、內地でも讀んでゐるし、レベルからいつてもど內地と同じところまで行つてをるといつて心してゐるんです。やはりなんか、光洙さんの作品を讀んでめて朝の方の生活、人を理解するをんだやうな氣がするんです。

【李光洙】朝の人といつても大は東京でされてゐます。

【菊池寛】あなたは東京にゐらつしたことはないのですか。

【李光洙】私は中學からずつと東京ですから、のを取つてしまへば何もないわけです。

【菊池寛】といふものをへたけれども、朝のと內地のは二、三千年前に分かれたといふ氣がしてをるのですが、たゞ內地のに南の血潮がはいつて三分はつてをるが、七分は同じが流れてをるのだといふ氣がする。日本のを見てもやはり昔は九、四國、中國、朝半は同じ內にあつたやうに思ふ。その東北、關東あたり、內になかつたやうですね。九を中心にこちらの方が同じ、同じであつたのではないかとふんです。

【鹽原時三郎】朝から見ると慥にさう感じます。だから、さういふ方のがんです。

【菊池寛】朝に來てじたのでいが、なんか同じではないけれども、こちらの方がて上品だといふ氣がする。內地人の鼻が低いといふのは、慥に南のが混つてをるのだと思ふ。僕は何時かに行して朝に寄つたときに、百の人のを見ていたのですが、いゝ顏をしてゐる。

【小林秀雄】僕の顏なんか朝のですね。（)

【原時三郎】どつちかといふと三のが半人のだね。

【池】內地人のには、どうしてもネグリート度ネシヤのがはいつてをる。

【小林秀雄】のところは出雲だから分にはいつてゐるとふね。

【鹽原時三郎】あそこは一番朝とのあつたところですね。こちらは古代神道なものがありまして、神參が非にはやりい。城大の今村のによると、古、、朝、內地夫々のにをされたのがど同じものです。

【池寛】半に來て內地人を見るとみんな朝人のやうにへて來る。まで影響をけるのですね。

【原時三郎】の色なんかもだん〱似て來るからね。

【李光洙】[鹽]原閣下もさうぢやないですか。（笑聲)

【原時三郎】よくてゐると朝の人に褒められるよ。（笑聲)さういふところから內一で行き得るといふ信を持つてをる。

【李光洙】半島人の一番[の]惱みは（し私は中學からずつと東京でされてをりますが）何時も諺文でかいてをるから、國で書くとなると、中々自にかけない。どう書いていゝものか悪いものかつてをります。

【小林秀雄】秋田雨雀さんが輯なさつたものがありましたが、車の中で讀んで見てが下手だとつた。もつとうまくせるとふ。

【菊池寛】然し年あたりから、內地に朝學がはり出したぢやないか。

【鹽原時三郎】それは、人會が成されたのと前後してはやりはじめたわけですね。（昭和15年8月14日）

【3】　文人と書く機關

【寺田瑛】たち新人の立場としては、に今日のやうな場合、その紙に特色をつけるには、何うしても家や學からめるのが近道だとふんです。たゞへなければならないことは、中のい人の原をせさへすればよいかといふのに、それはひます。その、京城日が何にん張つても、中の大新にべてはに於ても相手に於てもふがないから、くとも朝的なローカルなものを作りたいとつてやつてをりますが、內地の人としては何とつても大學の先生か、の先生といふ人たちに限られて、といふものがないので、昨年のあたりから朝の人の力を得てさういふ人達に書いてふことにしてゐます。計はとつてをりませんが、一ヶ月廿五日出るとして、その中半數は朝に書いてふやうにしてをります。朝に國新の紙面を開して盡力してふようになつたことについて自分でふのも可笑しいが、くとも半の一翼を擔ふ私の新として、一寸自負してよいのではないかとつてゐます。

【李光洙】私なんか寺田さんに書けと云はれて書いてゐるわけです。朝の文人達が國で直書くには京城日が一番いゝ。

【菊池寛】南にお目に掛つた時に、に朝のの励金として、もうし金を出していたらいゝといつたのですが、やはりかういふことの發達をすには、どうしても家がにまれることが大事な條だとひますね

【鹽原時三郎】いゝことをいつて貰つた。

【菊池寛】朝文人には、今日書く關が非常にいから、さういふで書く關を分にへる。さうしてどんどん作をさせる。さうすればな人が出る。も自然そのを讀むといふことになる。さういふで、人達も發し、讀む方のもするのではないかとふね。

【原時三郎】國神朝盟では、さういふやうになり得るになつてをるが、その方面で繼續して何かやつて見ようといふことになつてをります

【寅燮】事長におひしたいのですが、人會といつたやうなものをお作りになつたら何ですか

【菊池寛】なんか東京にけちなものが出來てゐるのですが、中々ね、あれは……

【寅燮】內地人には書齋があるけれども、朝には全くないのですから……。

【鹽原時三郎】それを書に利用するとてふのかね。（笑聲）

【寅燮】文藝賞の話が出ましたが、出、事を朝人にやらせるのもいゝと思ひます

【鹽原時三郎】それはいゝだらうね、それから會はもう出來ます、それは何時になるか分からないが一間の間に入に附したいとつてゐる。けれども全達に提供するのぢやないですよ。三つに分けて居るのだから、その一つだけ。一寸小綺なものだ

【寅燮】この間何かで集まらうといふ時でも集るところがない。

【菊池寛】どうしても原が取れる設がなければ進歩しない。新の學は一番ですから一つ用を山つてやつたらどうですか。

【寅燮】朝で一番高く原を出す關があれば。

【李光洙】人會でを出しましても、東京の先生方に原を差上げて書いてくわけには行きませんから。

【菊池寛】あなたの方でをお出しになつて、いゝ作品が載るやうになれば、內地でも相當賈れるとふ。さういふで最の一、二年は或る度しても、いゝになれば內地でどんどん賈れるやうになつて、賈にも成立つとふ。

【鹽原時三郎】さうやるといゝですね。（昭和15年8月15日）

【4】　 國語普及の期間

【李光洙】人達も新しい心持でのをとつてをりますが、書くところがないのです。

【徳永進】一つはが難しいのですね。私も大いに朝に朝の作家に書いてつたのですが、私の方にゐる今度氏した後といふ記者が赤んがもうしで生れるときに唸る、それをどういふ風にしていゝか分からない。幸に後さんのさんが內地人ですから、どんなにして生れるか訊ねてみたのですが、生と子を生んだことがない。（）それで非につたのですが、さういふの葉がなかなかうまく出ない。それで先生にひたいのですが、對に難しいでせう。

【辛島驍】は難しいですね。

【鹽原時三郎】朝の令がるときに、の問にかういふことを訊かれた。朝で諺文をに取入れて、それで讀ませるものがあるかといふのです。例へば中學になると、國では徒然草であるとか、さういふ中古を持つて來て讀ませるが、諺文でさういふものがあるかといふのです[。]はろないといつたのですが[。]韓國時代の問でこちらに來てをつた井上角五郎さんはいですね[。]それまでは漢文だけで書いてをつたのを、諺文まじり漢とされたさうしたら、それが非なひでめられて…

【菊池寛】朝の古學はやはり諺文で書かれたものですか。

【李光洙】萬葉集とか古今集にたもので歌は數千ありました。その御[天]歌、月千といふものがありますがこれは様の書いたもので一つはお迦様の一生を書いたもの、もう一つは李朝の[太][を]書いたものでそれが一番□からいつても大きい。例の春、清ののものを書いたのやうなものです。それから諺文の記といつたやうなものが何十かありますが、とか、大學をして讀ませる。をつた者は諺文がわかるのです。國がとなつて國が及され、朝人全に國が讀めるやうになるのは早くても三十年、若くは五十年後になるとひます。だからとつて、諺文しか讀めない人をつたらかしてくわけには参りません。一時でも國のわかる朝人が出來るまでは、諺文學でなければならぬとひます。

【鹽原時三郎】さうなんです。成だが、これはへなければならぬ問だ。一應は竝行してんで行くが、何處かで一本にしようといふときに、どういふ手をつたらいゝか、といふのが問だね。

【李光洙】それは自然に決るのではないでせうか。

【鹽原時三郎】さういふやうにもへられるが、無をすることはどんな場合にもへられない。

【李光洙】が設定されてから、くとも五十年は目です

【鹽原時三郎】であるかどうか分からないが、朝の子全が定年に達したら、學校に入れ得るといふ時代は、昭和廿五、六年になるだろうとふ。それが七つ八つに入つてりに五十年として非に長い。

【李光洙】そのときから計して四、五十年は諺文ですね。

【鹽原時三郎】七、八つではいつて三十年、四十年つと、恰度そのはピラミツドになる。今が四五分だから。

【鄭寅燮】池先生、內一の効果を現はすために、朝の人物を主にして、そこで働いてをる內地人との關をいた作品を先生あたりから出していたらよいと思ひますが。

【菊池寛】本當にに和するには、やはり學とか畫といふものによつて一するよりにない、僕は政治、會[に]朝の人たちが東京に來て、もうし各方に活躍してひたいとふ。現に東京では朝の方で、頭角をあらはしてをるといふ人は數人しかゐない、やはり東京でも學に、政治の方にくとも百人は活躍してへる時代が早く來ないと目だとふといふやうなことを何かに書いたのですが、さうなれば自然に渾然として一するとふね。（昭和15年8月16日）

【5】 內鮮力を協せて

【鄭寅燮】會で斯ういふ計畫をして居ります。朝の人は內地の生活を主にした作品を書いてをりません。會でして、ゆつくり內地の田舎を行させて、そこでしんみりと行記を書かせる。さういふものを作らせるやうに勵してみようといふのです。そしてさういふものを年々出する。つまり內地の人に朝の生活といふものを作品に現はしてひ、又朝の人が內地に行つて見た內地の生活を取上げて行かうといふのですが、それは或る度計畫して力しなければならない。今までのやうにつておいてはいかんとひます。

【菊池寛】さういふ事をするには內地の中は一と月か二た月ではなかなか分からない。せめて半年か一年こちらに來て、半の生活をしないと分からないでせう。

【鄭寅燮】米正氏の『白蘭の』は評判です。あれはの生活ですけれども、あれは作家ので、あゝいふ生活をしないでも出來るのではないでせうか。

【鹽原時三郎】あれは實地につて書いたのですね。の知つてゐる中が出て來ますよ。

【鄭寅燮】滿員々々で何回もです。それでもです。

【辛島驍】それに關して斯ういふ事をおひしたいとひます。朝の人達と此處にんでゐる內地人とが力して、一緒に新しい朝を作りあげて行かう。小さな點では生活の相、習慣の分からないところとかいろいろな擦がありながらも、然もそれをえて、例へば人會もその現れですが、さういふものを立てつゝある氣持、それを單に朝そのものを書かれる時に、朝だけに注目なさらないで、內一となつて盛り上りつゝある力、さういふものに特に目をふれてきたいと思つてをります。『白の』の中に人と日本人が力するがかれてをりますが、朝においてもそれと同じものがあるのであります。お互にしながらやつてをります。

【池寛】今度新で五和といふ映畫を作つてをりますがそれは日本人と、朝人と、人と、支人と、蒙古人、この五族について一つづつ一人が五つそれぞれ書くのですが、うまくするやうに書けるか、どうかしいのですけれども、その映畫では內地人、朝人、支人、人、古人の五つのを渾然とした映畫を作る計畫で、その輯をまれてをりますが、その場合に朝のは貴下方におひして書いてくかも知れませんが―――。

【辛島驍】な方がにみえてをりますから、どうかおひしたいと思つてをります。

【菊池寛】さういふ大構圖の映畫がうまくまとまるかどうか、あやしいけれども、しうまく行けば非にいゝですね

【寺田瑛】新の作長の今村が參りまして、私も會ひましたが、あゝいふとこでは『白蘭の』があたつたから、然もそれに、香蘭といふ女が出てあたつたからといふ動機が若あるとひます。現に大でも最近こちらの峰といふ女を使つて『アリランの』といふのを作るといふ事で、今ふに行つてをりますが、『白蘭の』があつたからやるといふやうな賈なものでなしに、もうし本なでさういふ事をやつてもらひたい。映畫会の方は仕方がありませんが、小説等の作品の上では、もうし賈氣を離れたところに行き得るとひます。おいでになつた會にどうかさういふを、御見になつたところを何でも取入れてく事はよい事だとつてをります。（昭和15年8月17日）

【６】　『文學賞』の問題

【李光洙】朝の文壇と申しましても、來の諺文學はから申しまして三十年です。諺文學としましての大の目がついてゐるであります。それが昨年人會が出來ましてから取りあげまして、日本國學の一としての朝文學をたてようといふ計書でありまして、來の作度をてゝ、國學の一つとして朝學を書かうといふ事になつてをります。さう申しましても、めるにあたりましては、朝人でまごついてゐる人もありまして力がい。それで力いパトロンが必要でありますが、原閣下は非に力いパトロンになつていてをりますが、もう一つは中のの先の方が『んだ馬のを五百金で贖ふ』といふへで、新しく生まれる學をしてもらひ度いとひます。その二つものが一になれば、新しい學が出來るとひます。

【菊池寛】貴方の會でこれはいゝ作品だといふ事をして下されば、僕のに何時でもせていゝとひます。書かれたものがり長いととしてりますが五十枚前後のものですと、貴方の方でもいゝものだとしてもらへば何時でも載せます。朝學は非にがよいのです。內地の學にしてレベルからいひましても決して落ちない。

【鹽原時三郞】光洙さんがいはれたやうに、國の學としての自が非に大きなです。最近まではどうして日本と分しようかといふにあつたとつて差支へないです。それがに日本と一にびていかうといふにりつゝありますが、この一のには相當ながありまして、これを先にもどして、これを壊すといふも非に厚であります。に人にさういふへをける事もあります。內地人側の者がそれを非にして行くのが本當ですけれども、彼等が分らんといふ問もあつて、內の時代にあります。これをめなければうまくびて行かないだらうとひます。

【菊池寛】あたりで學、、画を增して出してもらひ度いですね。

【鹽原時三郎】例へば公の機關で人會を護して立てゝやる、さういふ場合にどういふ手をとつたらよいでせう。

【菊池寛】といふ事は、原を出すといふ事ですね。いゝものを書いた人にお金を出す。

【鹽原時三郎】によい雑誌もへて、それにせる、原稿も出すといふ事ですね。總督府で出す雑誌といふ譯にもいかんが、それを陰から援助するといふ事がよいでせうね。

【菊池寛】京城日の小説ほ非朝の方に書かせるやうにしたいですね。

【鹽原時三郎】これは相當に紙があるやうです。

【菊池寛】原も長篇ですから相當出してもらひ度いですね。

【寺田瑛】朝の人に京城日に小説を書いてふことは、最近の會に計畫して着手しましたけれども、それは一寸止めることにしました。實は、現在載つてゐる田俊氏の『牡れず』が田さんが中支に行つて行方不明となつてがとれなくなつたため、定ではあるが、ごく篇ながらその翰をがうといふので李光洙さんにおひして、取ず一回だけ出來てきたので、今日からせようといふ時に田氏の原が來たものですから、、せずにりました。然しこれから會ある毎にさうしたいとはひます。

【菊池寛】夕に１ヶ月の短篇小説を書いてせるとどうでせう

【寺田瑛】する價はあるとひます。私もへてをります。

【鄭寅燮】さういふ事は、大擔にやつてもらひたいですね。

【菊池寛】さういふことは、でも十分に紙を給してもらはんと。

【鹽原時三郎】の場合は、の方をにさせればよいか、いか、選ぶのが……。

【鄭寅燮】會に任してもらひたいですね。

【菊池寛】會に任して、會には內地人も入つてゐるのでせうか。若し何でしたが會に入つてもよいですね。

【杉本長夫】今までは會と內地のとがとれてをりませんでした。

【小林秀雄】會を通してやつてければ、の方は何時でも小説の發表なり通信なりは……。

【杉本長夫】これから仕事をやつて行くになつてをりますから、通信をおひします。

【小林秀雄】の方はとつてをりますが、こちらも取れますから、毎月通信を送つてければせて行くことが出來るのです。（昭和15年8月18日）

【７】　 中央文壇と交流

【鹽原時三郞】事務所の問ですが、そこでいろいろやつてくれる人は、人でも實にやつてもらはんとるね

【鄭寅燮】杉本さんにやつてもらつては・・・・・東京で東文人大會でも開いて、支、朝、內地のれで一會をやつていろいろやをやつたらよいと思ひます

【寺田瑛】昨年十二月二日の文人協會の會合で、いろいろな計畫だけは申合せましたが、今年のの、朝の人と內地の人と東京で歡會を行ひ、日の會あたりで會をして、朝といふものを認させようといふ計畫をたてましたけれども、實はり金がないものですから、今日までそのになつてゐりましたが、将來かういふ計畫を進める上において、例へばであるとか、家會とかに御力ふはないものでせうか。

【菊池寛】金の出るはありますの方で出[す]やうにします。

【鹽原時三郞】何か東京でしのある時に、参加しないかとびかけてもらひますと、こちらから二三人代表な者を送つてみます。それが差當りの問ではないかと思ひます。

【鄭寅燮】以前造と話がありまして用は知らんが名前はすといふ事で、名無實になりましたが、實名前をすなら、も一切見てもらはんと出來ないことです。恰度山本長がでしたので……。話は違ひますが、モダン日本の朝を每月出す事は出來んのですか。

【菊池寛】原を出してもらへば……。

【鹽原時三郎】あれをが見たいといつてゐましたので、方々して一みつけました。

【菊池寛】をで出して大いにしてき度い。

【杉本長夫】人會の方で雑誌を出せば、相當やつて行けるとひます。

【菊池寛】し、などは幾らがあつても、でやつているものはきしない。のある中に賈に成立つやうにすることが必要です。のある人がやつて一年、二年をけつゝ、賈に成立つやうにすることが非に大切です、お役所で出すは、何時の間にくなる、（）本當に賈らうといふ氣がないと目です。

【鹽原時三郎】用の事は內地にり心かけんでも、朝でだつての金は出る。

【菊池寛】朝學の新しい實がばれる[の]です。朝學に內地の人は關心を持つてゐるから、いゝものが出れば、內地で賣れるやうになりはせんですか。

【徳永進】映畫はどうてすか。

【鹽原時三郎】映畫法が出來て、々の方で調べてやるのですが。

【徳永進】朝にある現の畫會のは…。

【鹽原時三郎】そこまではへてゐない。いゝものが來たらする。いものはせん。ドイツの遣方をみますと、日本のは非にで話にならんとひます。

【徳永進】と行にやつていかれるといゝですね。

【鹽原時三郎】日本のはさういふ方では力を持たないやうですね。

【杉本長夫】內地の家會と動とは、どういふ風にびついてゐますか。

【菊池寛】びつきはありません。僕は動の員であつたけれども動の員といふではないから、その代り後動といふものを起して、から大いにやるから堪してくれといふ事で許してもらつたのです。

【鹽原時三郎】こつちでは實によく結びついてゐます。

【菊池寛】光洙さん、非いらして下さい。こちらで用は全しますから、二、三人でいらして下さい。

【鹽原時三郎】さん、うございました。では、これで……（昭和15年8月20日）

1. 昭和15年8月13日～20日『京城日報』夕刊3面に揭載 [↑](#footnote-ref-1)